

## 地域の潜在力をつかむ ～『「地域の今」再確認シート』による気づきの試論～

調査研究部 渡辺 靖仁

### 目次

1. 課題	19
2. 地域経済と潜在力に関する先行研究	22
3. 方法	27
4. 潜在力の素朴なアプローチ －因子分析による現象の合成	28
5. ダイナミックな動きを加味した 潜在力把握のアプローチ	32
6. 「地域のいま」再確認シート	39
7. おわりに	48
付記	50

### アブストラクト

本稿では、人口減と高齢化による地域の弱体化に悩む地方圏の住民が、当たり前の中の「日常」の中にあるかけがえのない価値をどうしたら再認識できるかという観点から、『「地域の今」再確認シート』の素案を作成した。地域の潜在的な価値を日常の中で「自ら簡易に感得」し、その意義を再認識する手段としてこのシートを活用する試みである。

このシートの作成のために、地域の活動を表層と基層に分け、基層の力がどのように表層に現れるかをアンケート調査によって把握した。この結果をもとに、表層の要素の活動がどれだけ基層の力に結び付くかを推計し、確認シートに展開した。あわせて、地域を守り育て、育てられてきたことにも気づいていただくシーンをもシートに含めた。

付記に示した通り、本稿は日常のある平時を前提とした研究である。震災で多くの人々の日常が失われた。再び日常が復活してこれが当た

り前となる平穏な時の到来を祈っている。

### キーワード

地域の構造、潜在力、ソーシャルキャピタル

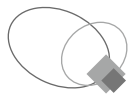
### 1. 課題

#### (1) 地域再生の実践論－質の評価

農山村再生の手段は、公・共・私の各分野で多くの提案がなされ、実践とノウハウの蓄積もまた行われている。公の領域では、国土交通省など公共部門が提供する支援制度は、従来の「霞ヶ関によるプランニング施策への補助金の充当」から、コンペ方式による地域活性化の提案作りと支援金の獲得プロセスおよびその実践そのものを評価するプログラムに変貌してきた。地域資源にある程度恵まれた地域では、例えば比較的大規模な農家を抱える農村地帯で行われる都市農村交流タイプの「農泊」(宮田 2010)が人口に膾炙している。加えて温泉という観光資源を持つ地域では、さらにほかの地域資源や人材を発掘して活用するさまざまな体験型交流イベントのいわば見本市を提供して地域活性化につなげようとする「オンパク」<sup>1)</sup>などの取組み例がある。その一方で、そこに住む人々にとって何もないと思われているところでも住む人自らが地域の良さを再発見する「地元学」(結城 2009)や、コミュニティの再生を目指して地域の力とあるべき姿を自ら再確認しながら行う地域作りのプロジェクトも多数ある。その手段のひとつである地域作りワークショップでは、優秀なファシリテーターの当意即妙な示唆のもとで、あたりまえの日常と受け止められていた沢山の「普通」の事柄を新たな視点から再評価する機会が多数演出されている。

こうした農山村再生の企画と多数の実践事例において、「地域づくり」「まちづくり」「地域の再生」「コミュニティの再活性化」「つながりの再評価」という言葉が数多く登場する。この「再生の物語」には夢がある。明日を

1) 例えばジャパン温泊の活動 [http://japan.onpaku.jp/onpaku1\\_1\\_2\\_20110328](http://japan.onpaku.jp/onpaku1_1_2_20110328)



見つめる姿勢が鮮やかだからである。それはときに取り返しのつかない出来事に遭遇する日常をかさねながらも生きていかざるを得ない人の、いわば大人の童話のようなものをも想起させる（ヘルマン・ヘッセ「メルヒェン」）。もちろん地域再生の取組みでは、いま掲げた童話という名詞の内包する柔らかい雰囲気だけの企画のものから、地域資源をビジネスに転換しようとする地域外資本の調子の良い主張や、人口減による経済力の弱体化に直面しながらもなんとか生活インフラを維持しようとするぎりぎりの試みまで、その範囲は幅広い。地域再生を目指し、できることから住民が手を取り合ってその輪を大きくする例も、新たな地域ブランドを形成するためのシステムティックな取組みもある。「only one」を「売り物」にするための要件の整理もなされているし（和田他 2009）、そのメリットとデメリットの分析もある（大江 2008・佐々木 2011）。そうして生まれた反省のひとつは、地域のかげがえのない資源を市場競争にさらす空しさであった（岩崎 2010）。さらにいえば、資源という名詞の持つ市場性の意識への反動もある。なにより、歴史と慣習で形成されてきた地域における生活の質への配慮が重要とすることであろう。この質の評価は、正直なところそもそも研究対象にするには厳しい条件が必要と考えられていた（大竹他 2010）。主観性の強さの評価とその因果関係の難しさに関わるからである。しかしながら現在、我が国の地方圏は自立を強いられ、そのためになんらかの再活性化の表明が必要というプレッシャーがすべての農山村にかけられている。ところが経済基盤の異なる地域において、質的な評価を無視して地域の満足度の計測も再生もあり得ない。そもそも主観的な満足度や幸福度は、地震の直後や景気変動にも影響を受けるように、その指標としての安定性は、社会状況との関連で左右される。この点で信頼性の評価に議論があること至当である。しかしだからといってその主観に基づいた指標が信頼性に欠けるにしても、その指標の程度と社会状況との関連を分析する意義は失われぬ。例えば戦争のない社会の人々の暮らしを想定すれば明らかのように、社会がどのような状況であれば生活の満足が高いかを知るのに反論はなかろうからである。

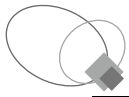
また、地域活性化の豊富な実践例の一端に触れ、さらに当研究所の行った複数地域の現地調査で聞こえてくるのは、「優秀なファシリテーターはと

りあいになる」「しかしその場合のコストは無視できない」「そのあとは茶飲み話の話材」という手法と費用・効果の問題、「寝た子を起こすようなことをして」「安定を農村に求めるなら活性化はそのアンチテーゼ」という価値観を問う指摘、あわせて、「それでも穏やかな再生には意義がある、なぜなら地方圏に特有のゆっくり流れる時間を支える意味を見いだしてくれるから」という声であった。これらはイベントによる一過性の騒擾状態よりも着実な歩みを重視する方がよいと受け止めることができる。

## (2) 『『地域の今』再確認シート』の試論と意義

こうした事柄を踏まえて、本稿では、この、再生の物語を紡ぐ一助とするために、その地域の持つ潜在的な力の一端を映し出す『『地域の今』再確認シート』の作成を試みることにした。このシートでは、地域住民の質的な評価そのものを対象とする。コストと手間は縮減した。チラシ代と読んで記入する短い時間のみである。結論を先取りすれば、この再確認シートはそれに触れた人の認識をほんの少し変えようとするだけのものである。事実を変更したり、地域再生計画をアグレッシブに企画実践するためにその人を鼓舞するものではない。もちろんそうなれば望外の効果は期待できる可能性はある。しかしこのシートは、むしろ地域のいまを培ってきた力にあらためて敬意を表し、当たり前すぎて日常に埋没していたものに光を当てて再認識してもらうことを目的としている。舞台で言えば、あくまで裏方にあったその認識を、カーテンコールの際に少しだけ挨拶に登場させて、感謝の気持ちを注ぐ機会をつくろうとするものである（「人生は舞台、人は皆役者」シェイクスピア）。敢えて付け加えるなら地域という舞台を作り動かしてきた、当たり前前の習慣を作ってきた人と力に謝意を表明するためのものである。そのためにも、大がかりなイベントを行うのではなく、一人一人が気楽に取り組めるハードルの低いものでなければならない。

この再確認シートの最終的な目的は、こうした気づきと感謝のシーンを地域の個人個人に対してささやかながら演出することで、農村において進行している「誇りの空洞化」（小田切 2010）に何らかの歯止めをかけようとすることである。もちろん本稿の提案によってそれが十分に可能というわけではないが、数ある歯止めのための手段の選択肢の試論として提案する。「いま、そこにあるもの」をかけがえのないものと認識するための、柔



らかい心を再び呼び覚ますツールとシーンをつくろうとするものである。

### (3) 本稿の構成

以下、本稿の構成は、次節で若干の先行研究に触れ、第3節で質的評価に関する本稿のアプローチを掲げる。第4節は素朴な因子分析による地域の潜在力の評価とその難点を指摘し、第5節ではその難点を踏まえて行った地域の潜在力を把握するためのアンケート調査を紹介する。第6節はこのアンケートを基礎に構成した地域の今を確認するシートを掲げる。第7節はシートの評価と今後の課題である。

## 2. 地域経済と潜在力に関する先行研究

### (1) 持続可能性の網羅的な指標

地域経済の把握方法については、民力指標をはじめ地域産業連関分析など膨大な研究の蓄積がある。その全貌のサーベイは本稿の目的ではないのでほかに譲る。ただ、本稿の内容に関連し、地域社会および地域経済の把握方法として著名なものを紹介する。

人のつくる地域社会の持続可能性については、これを包括的かつ網羅的に評価する目的で行われたJFS (Japan for sustainability) の総合的な定量化指標がある。この指標では、持続可能性を [1] 資源・容量 [2] 時間的公平性 [3] 空間的公平性 [4] 多様性 [5] 意志とつながりの5つの基本概念で定め<sup>2)</sup>、[1] 環境 [2] 経済 [3] 社会 [4] 個人の4つの基軸で、公開されている統計や環境団体の活動量など200近いデータによってその国

2) 5つの基軸につき若干補足する。

- [1] 資源・容量：有限な地球の資源・容量の中で社会的経済的な人間の営みが行われること。ありがたい、もったいないという概念。
  - [2] 時間的公平性：現行世代が過去の世代の遺産を正当に継承しつつ、将来世代に対してそれを受け渡していくこと。
  - [3] 空間的公平性：国際間、地域間で富や財、資源の分配が公平に行われ、搾取の構造がそこにならないこと。三方よし。
  - [4] 多様性：人間以外の他の生命も含め、個や種、文化的な多様性を価値として尊重すること。
  - [5] 意志とつながり：よりよい社会を築こうとする個人の意志と、他者との対話を通じたつながり、柔軟で開かれた相互対話と社会への参加。
- これらは、1987年のブルントランド委員会による先駆的定義をはじめ世界各国の持続可能性概念をベンチマークし、比較検討した上で、JFSが独自に定義づけしたもの。用いられた指標のデータは[http://www.japanfs.org/ja/\\_view/data/images/jfs\\_data.pdf](http://www.japanfs.org/ja/_view/data/images/jfs_data.pdf) 詳細は<http://www.japanfs.org/ja/jfsindex/framework/pages/011076.html> 20110328

と社会の特徴を計測するものである。個々の活動がどれだけ社会の持続可能性に貢献するかについて一定の配慮をしようとしているのがその特徴の一つでもある。しかし網羅性を確保するために指標の量の基礎データとしては膨大であり、日常生活の力がどれだけ持続可能性に反映されているのかについて評価が分かれる。また、基本的には国単位での評価を目的としているので、地域社会に援用する際にはデータ集めなどの事前のステップが求められる。

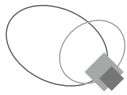
### (2) 地域経済特性の簡易な把握

地域経済の比較的簡易な把握方法としては、農村地域に関して、例えば橋詰2003が、定住水準と農林業の力の41指標を用いた地域活性化度を計測し、農山村地域の活性化状況と市町村の活力診断を行う地域活性化診断シートを提案している。具体的には世帯人数・幼少人口率・課税所得率・林業面積などの公開された統計値を用いて、定住活性度・経済活性度・農業活性度・林業活性度なる指標を作成し、これで農村地域の特徴をレーダーチャートで表しランキングするものである。簡易なシートによる地域経済の測定という点で、本稿の目的に合致するものである。また、研究というよりはむしろ地域の生活の利便性を一般にわかりやすく示すものとして、東洋経済の行う「住みよさランキング」がある。具体的には病院数・小売店売上高・都市公園面積などの14の統計値を用いて安心度・快適度・利便度・富裕度・住宅水準充実度なる指標を作成し、これで自治体をランキングするものである<sup>3)</sup>。いずれも公開された統計指標を用い、客観性を保

### 3) 東洋経済 住みよさランキング

[http://www.toyokeizai.net/business/regional\\_economy/detail/AC/55f93ec0319684ee1e6b7af0aab312fe/page/4/20110328](http://www.toyokeizai.net/business/regional_economy/detail/AC/55f93ec0319684ee1e6b7af0aab312fe/page/4/20110328)  
ランキング算出指標は以下のようである。

- ・安心度 ① 病院・一般診療所病床数 (人口当たり) ② 介護老人福祉施設・介護老人保健施設定員数 (65歳以上人口当たり) ③ 出生数 (15~49歳女性人口当たり)
  - ・利便度 ④ 小売業年間販売数 (人口当たり) ⑤ 大型小売店店舗面積 (人口当たり)
  - ・快適度 ⑥ 公共下水道・合併浄化槽普及率 ⑦ 都市公園面積 (人口当たり) ⑧ 転入・転出人口比率 ⑨ 新設住宅着工件数 (世帯当たり)
  - ・富裕度 ⑩ 財政力指数 ⑪ 地方税収入額 (人口当たり) ⑫ 課税対象所得 (納税義務者一人当たり)
  - ・住宅水準充実度 ⑬ 住宅延べ床面積 (世帯当たり) ⑭ 持ち家世帯比率
- このような5.2指標を用いているため、例えば「利便性」が上位都市の特徴は、県庁所在地や人口の多い都市に近接し、大型ショッピングセンターなどの商業施設が立地している都市が上位となっている。



ちつつ共通の基準で複数の地域の相対評価を可能とする。こうした指標は地域経済の実態と暮らしの感覚との橋渡しをする効果ももちろん期待できる。しかし、集計化された指標の活用であること、統計として把握できる顕在的な情報を用いているため、潜在的な力の評価としては必ずしも十分ではない。

また、そもそもこの種の経済指標で生活の幸福度を測るのは難しい。2008年度国民生活白書が指摘するとおり、「経済的豊かさは、生活満足度の上昇に結びついていないが、こうした現象は先進国に共通している」のである。このことを背景に、近年、多くの国・団体に、豊かさをめぐる様々な指標が提案された。次項で紹介するスティグリッツの幸福度指標や内閣府の検討している最小不幸社会のための指標もそのひとつであろう。

### (3) 地域力と関係性

この観点からの指標を検討するとき、我が国の場合、地域力の研究にも触れなければならない。

阪神淡路大震災の災害救助と復興活動に関して、これを公共部門ではすべてカバーしきれず地域の様々な集団の必要に応じた活動がかなりの実績を残したことを契機に語られるようになったものに、いわゆる「地域力」がある。この概念の提唱者であるまちづくりプランナー宮西悠司によれば、地域力とは地域資源の蓄積力、地域の自治力、地域への関心力により培われるものであるという（宮西 2004）。この力は、災害復興の局面で明らかになったように、基本的には行政のみでは対応できないものを地域社会全体でカバーすることの可能性を表すものである。その後地方財政事情の悪化からかなりの自治体が行政のサポートパワーとしてこれに注目し、多くの自治体によって様々な定義がなされている<sup>4)</sup>。

また、山内直人は地域力とは「地域の問題解決力、コミュニティガバナンス、ソーシャルキャピタルの3要素から構成される」という見解を

4) 例えば、前大分県知事の平松守彦による「地域の潜在力」、神戸市の「市民と市が互いの役割を尊重し、協力して課題解決を図る力」、岐阜市の「地域の魅力、安心・安全な環境、市民の公共マナーやまちづくりへの意識をかもし出し、築き上げることで培われる力」、北海道の「『地域』における信頼関係や互酬性の規範を持つ多様な住民や組織のネットワークが、地域の公共的、社会的課題に気づき、各主体が自律的に、もしくは協働しながら、地域課題を解決したり、地域の価値を創出する力」など。

示している（豊福 2007 から再引用）。うちコミュニティガバナンス：Community Governance とは、地域コミュニティにおける民主的なルールづくりに向けた運動を示す。ソーシャルキャピタル（社会関係資本）は、政治学者の R. D. Putnam（1993）によって提唱された概念である。ソーシャルキャピタルは、社会構成員間の関係性に生じる価値で関係依存的であり、信頼・規範・ネットワークの3つの構成要素があるとする。

我が国の地域社会研究では、この3つの構成要素のような議論は、水の利用による社会関係の形成などの歴史的経緯を踏まえて古くから行われていた（例えば玉城 1984）。しかしこの3つの構成要素は問題解決のための力の源泉を探るという点で示唆的である。

内閣府の行っている「国民の幸福度」に関する研究は、現在とりまとめ中であるが、その検討の柱のひとつである「国民生活選好度調査」による幸福度の把握によれば、幸福度に影響を及ぼす項目として「家計の状況」「就業状況」「健康状況」「自由な時間」「生きがい」「家族関係」「友人関係」「職場の人間関係」「地域コミュニティ」の9つを挙げている<sup>5)</sup>。

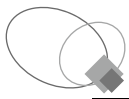
この検討の中で、内田 2011 は、幸福度の構成要素も踏まえた指標化を提案している。すなわち測定指標の構成は [1]「幸福度」そのものの指標と [2]「幸福度」を説明する要因の指標に分けて考えるべきであること、さらにこれらを通底する概念として [1]（個人の「主観的」）心身の健康 [2] 主観的なものと客観的なものをあわせた社会経済的状況 [3] 関係性、の3つを指摘している。特に3番目の関係性については、次の4項目が挙げられた。

- [1] 互いの信頼関係、親密な関係、個人の自由
- [2] ソーシャルサポートの獲得可能性、「孤独」でないこと
- [3] 家族・友人関係・会社などのそれぞれの領域における関係性への満足
- [4] 地域コミュニティ、ネット上でのつながりなど、広い意味での「絆」や「つながり」の評価

これらはソーシャルキャピタルの構成要素に一部重なる。

また、ブータン方式で知られる国民総幸福（GNH）政策は、[1] 健全な

5) 内閣府の行っている「国民の幸福度」調査の国民選好度調査結果 <http://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/shiryuu/2shiryuu/2.pdf> 20110328



経済発展と開発 [2] 文化の保護と振興 [3] 環境保全と持続的な利用 [4] よい統治の4つを柱にしている。特に2番目の柱では地域社会や家族のつながりを奨励するなど、関係性が豊かさを産む思想が体现されている。

#### (4) 指標の特徴と本稿の取組み

前項(3)で掲げた指標は、地域社会の構成メンバーのつながり具合を把握する、いわばソーシャルキャピタルの厚みの程度の把握や豊かさの定義と計測の試みなどきわめて興味深い要素を含む研究である。ところで、例えばスティグリッツの指標体系はGDP体系では捉えきれない国家の力を浮き彫りにするという目的がある。内閣府の幸福度指数においても地域間の経済力と生活支援力の相対評価を目的にしている。もちろん特定の地域のすぐれた点を把握するためには相対評価は有効な選択肢である。しかし地域社会のアイデンティティとは、例えば方言の持つ温かみのように、比較が難しい要素によって形成されている領域があることを指摘せざるを得ない。この点はすでに述べたように社会との関わりと言う尺度を導入することによってその主観の程度の評価が可能となり、関わり度合いとの相対評価を加えることによりその主観の程度の評価の相対評価も可能となる。本稿ももちろんこれを踏襲する。ただしこの手法は次善の策であることを認識していなければならない。この手法でこぼれ落ちるものをカバーする一定の工夫がさらに必要である。

このようにみると、ブータンのGNHを除き、先行研究はいずれも、地域住民が自ら手を動かして自分たちの力を確認するというには、量的に膨大であるうえにテクニカルタームも多く、親しみにくい。このままのかたちでは、統計で把握しにくい地域の潜在力を住民が「自ら簡易に感得する」のはきわめて難しい。「自ら簡易に感得する」ためには、比較可能性のある程度犠牲にしても、自らの地域の力を自ら描きあげるシーンを提供しなければならない。なお、ブータンの指標は宗教的な教義の体现を企図した政策目標であり実践のためのガイドラインである。もちろんこれを尊重する。しかしこれらは地域社会のかけがえのない価値をすでに個人が認識しているうえで展開されていると考える。まずこの指標を展開できるだけの認識の深さをどう獲得するか、どのようにして地域社会の豊かさに気づくか、本研究はこの点を課題としている。

そこで本稿では、統計で把握しにくい地域の潜在力を簡易に把握するため、独自にアンケート調査を行い、その結果をより簡便にして取り組みやすいものとすることを検討した。

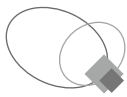
地域のアイデンティティの確認のためには、比較困難を前提として地域と自分との関係を振り返る観点を補充した。

### 3. 方法

本稿の分析手法は、基本的には、地域社会の潜在力を把握するためのアンケート調査を実施し、これを基礎にして、調査対象外の人にその質問に答えてもらい、全体の傾向と回答結果との差でその特質を浮き彫りにし、かつ、自らがかけがえのないものを考えるという手順を取る。

地域社会の諸相を問うアンケート調査を行うにあたって、地域の様々な要素を表層（上層）と基層に分けた。表層が顕在力であり、統計に表しやすい事柄、後者が表層を導く力となっているものであると想定した。水面を優雅に泳ぐ鴨の足は水面下で見えないけれども絶えず高速で動いている。その鴨の足の動きに相当するものに何らかのかたちで焦点を当てようとしたのである。

ここで地域の要素を表層（上層）と基層に分ける背景を補足しておく。生活や文化を上層と基層に分けるのは、上層文化・基層文化の二元理論を提出したナウマン（Hans Naumann）にみられるように欧州の民俗学の代表的な手法のひとつである。リーマンショック以降の過度の市場主義への反省から最近再評価されているいわゆる共同体も、短期的な利己主義を越える価値がその基底にあることが強調される。例えば、共同体を封建主義の代表としてこれを超克すべきとした大塚久雄の『共同体の基礎理論』（1955 岩波書店）とあえて同名の書物を上梓した内山 2010 は、流れが変わった今日的な意義から共同体を肯定的に捉える議論を展開した。その書名の副題は「自然と人間の基層から」である（傍点は筆者）。こうした共同体が持つと期待される価値そのものに向けた判断とは別に、共同体が農村集落と重なることを踏まえて資源調達構造からみた特質を生源寺 2008 は次のように整理している。すなわち、日本の農業には、上層と基層という2層の資源調達構造をもっていること、2005年の食料・農



業・農村基本計画で策定された経営安定対策と地域資源保全施策がこれらの層にそれぞれ対応していること、ここで上層とは市場経済に適応する農業経営の部分であり、基層とは、農業用水や農道通行などにみられる非市場的なコミュニティ活動であるとしている。そして今後は、市場経済への適応の面では格段のレベルアップを図りながら、他方で伝統社会の合理的な共同行動をしっかりと引き継いでいく、上層と基層の高レベルのバランスを達成することがこれからの日本農業に科せられたチャレンジであると指摘している。

本稿で試みる「地域の潜在力を住民が『自ら簡易に感得する』こと」は、この基層にあるものを住民に再認識していただくものであり、これによって地域の生産力の向上を有形無形に支える目に見えない力を発揮する雰囲気、静かな醸成効果が期待できると考える。

こうした観点から、アンケートは2段階にわたって行った。第1段階は、基層を知るための素朴なアプローチである。いわゆる地元学で実践され整理されてきた、地域の潜在力の5分野を想定した。さらに「自ら簡易に感得する」ために自分自身で感じる豊かさ指標の提案というシーンを設けた。次節で論ずる。第2段階は、第1段階の不備と難点を克服するため、より明確に基層を知るアプローチを追加してあらためてアンケート調査を行ったものである。課題で掲げた『「地域の今」再確認シート』の試論を提案する。

#### 4. 潜在力の素朴なアプローチー因子分析による現象の合成

地域の潜在力の定義にもとらえ方にも議論がある。各種統計で計測可能な地域の力をここで仮に「顕在力」とする。本稿では、そもそも、地域の力として重要ではあるものの統計に表れにくい質的な要素を、個人の目から把握できるようにしようとしている。この力は通常は目に見えにくいものであるから「潜在力」とする。これは、むしろ各種経済指標を作りあげている顕在力の背景にある地域の力ということもできる。

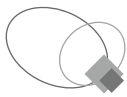
この力を個人の目から把握できるようにするには、多くの地域で実績のある地元学の考え方が有効である。いうまでもなく地元学はいわゆる「学問」ではない。地域にある文化や資源を見直して個性ある地域づくりを

行っていくための持続的な取組みである。地域住民が主体となって、歴史や風土、生活習慣の基本的な単位となる地元で新たな再発見をしていこうとする（結城 2009）。この地元学で発見した地域資源を分類する軸は、例えば西和賀町の実践にみられるように、群生・巨木・山などの自然系、歴史道や無形文化などの歴史・文化系、農林業などの産業系、自然探検・こけし工芸・食生活などの体験系の4つがある<sup>6)</sup>。これらの軸は住民が常日頃見ているものを整理しており、地元学はその価値を再評価し、住民自らがそれに気づくように誘うものである。

本節では、この地元学の提唱する枠組みを活用し、地域の潜在力の候補として主に農業への思い・日常生活への思い・地域の支援体制・自然への感受性・都市および地域内での関係性の5分野を想定した。さらにこれらの分野に該当すると考えられる地域の出来事・施設の充足度・活動の有無などを選び出した。有無や程度が答えやすいように表層に関する項目を多く含めた。これらの回答結果による5分野の要素の有無や程度を、代表性を一定程度考慮して抽出した全国の地方圏の住民にアンケートの質問形式で聞き、その回答結果のパターンから地域の潜在的な力を表す指標とその程度を抽出することとした。こうして、全国を対象に行ったアンケート調査の結果を基準とし、ある地域の住民がこれらの質問に答え結果をこれと対比することによって、その地域がどのような特色を持っているのかを指標の組み合わせであらわそうとした。これによって、新たにアンケートに答えてくれた地域・住民は、アンケート調査結果から導き出された平均像で捉えられる地域の平均的な姿との相対評価によって、自分たちの地域の強弱や高低などの特色を把握することができる。

ただ、このような指標は、一人歩きして勝手格付けに近いランキングに使われやすい。それは本研究の意図するところではない。そこで、これらの指標に加えて、全くの空白の指標を設定することを検討した。既存のデータから得られた5つの指標のパターンによる特性評価に加えて、既存のものではそれこそ把握できない、その地域の独自のものがあることを明

6) 岩手県西和賀町ウェブサイト <http://www.town.nishiwaga.lg.jp/index.cfm/8,0,83,29,html> 2011328



示するためである<sup>7)</sup>。

さて、潜在力把握のための表層を聞くアンケート調査を全国の農家を母集団として行った。調査対象者は、職業を農業とし、かつ、何らかの農産物を販売する農家685世帯である。2009年11月末時点で当研究所が技術的に調査可能な農家全量を対象としている。したがって全国の農家を代表するための手続きを厳密に踏まえたものではない。しかしサンプル農家の地理的分布は、7ブロック別に見るとほぼ全国の農家の分布の比に近い。また、サンプル農家の耕地面積の分布は、0.5ha以上の世帯であれば「農業経営統計調査」（農林水産省）の「営農類型別経営統計（個別経営）」の分布にも近い<sup>8)</sup>。したがって本調査結果は、0.5ha以上の層にあってはこの統計と同様の用い方による傾向把握が可能と考える。

調査票とその集計結果は、『「食品のブランド価値と生産者の補償ニーズに関する調査」報告書』（2010.02）にとりまとめた。本稿では、このうち地域の表層に表れる力を把握しようとした質問群に対する因子分析の結果を掲げる。表1である。

この因子分析の対象とした質問群に地域住民に答えてもらうことによって、その回答結果の傾向をはじき、相対評価による地域の個性の把握することには一定の効果がある。

しかし、第一に指摘しなければならないのは、この因子分析の寄与率49.4%という説明力である。寄与率は統計的には用いた変数の分散をカバーする範囲である。ほぼ半分をカバーする寄与率は、社会事象を対象とする多変量解析の分析としては説明力が決して低いものではない（松田1988）。しかしながら、残りの半分はいかなるものであろうか。因子を潜在力と位置づけた以上、寄与率は単なる分散の変動の説明割合を超えて、抽出した因子によって説明される潜在力の範囲とここでは捉える。この質問の構成や軸の評価では捉えきれないものが半分もあることは、地域の魅力を網羅的に把握するには必ずしも十分とは言わざるを得ない。

振り返ってみれば、これらの質問は、住民が簡易に回答できるようにす

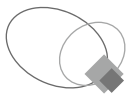
7) 5芒星は完全なるものの象徴である。が、それにさらにひとつを加えた6芒星は、より完成度を高めたものであると言われる。

8) 渡辺靖仁. 生産者の食関連リスク補償ニーズ. 共済総合研究. 2010, vol. 57, p. 36-60. の注3を参照。

表1 地域の潜在力に関する調査：素朴な因子分析結果

質問 \ 因子名	因子負荷量 (関連度合)				
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
Q4-10) 土地活用・財産管理について相談できる	0.747	0.084	0.097	0.017	0.054
Q4-4) 預貯金について相談できる	0.743	0.088	0.103	-0.056	0.127
Q4-5) 保険・共済について相談できる	0.738	0.040	0.138	0.021	0.138
Q4-12) 自動車の購入・修理について相談できる	0.733	0.040	0.127	0.119	0.114
Q4-13) 税務・法律について相談できる	0.729	0.079	0.058	-0.006	0.104
Q4-11) 農機具の購入・修理について相談できる	0.724	0.016	0.132	0.136	0.240
Q4-7) 介護について相談できる	0.715	0.151	0.194	0.091	-0.258
Q4-8) 病気について相談できる	0.710	0.193	0.170	0.115	-0.253
Q4-9) 就農や就職について相談できる	0.697	0.196	0.053	0.095	-0.041
Q4-14) 冠婚葬祭について相談できる	0.682	0.058	0.197	0.132	0.086
Q4-3) 農業に関してわからないことを相談できる	0.671	0.050	0.172	0.111	0.308
Q4-6) 育児について相談できる	0.669	0.208	0.102	0.067	-0.264
Q4-2) いざという時に、頼りになる	0.532	0.139	0.262	0.167	0.211
Q4-1) 地域の意見をまとめてくれる	0.510	0.072	0.286	0.135	0.276
Q2-14) 随時、都市部から子供の農業体験を受け入れている	0.149	0.795	0.004	0.108	0.097
Q2-13) 随時、都市部から大人の農業体験を受け入れている	0.130	0.790	-0.014	0.112	0.118
Q2-12) 地元学校の教育目的で農業体験を受け入れている	0.204	0.619	0.038	0.092	0.203
Q1-9) 山に積もった落ち葉の土は撤出し、農家で肥料としている	-0.036	0.571	0.178	0.133	-0.099
Q2-18) 往診サービスなどの医療サービスを利用している	0.101	0.558	0.164	0.003	-0.129
Q1-4) 農作業は、工程を分けて地域の仲間と分担している（農作業の手伝いをする事がある）	0.121	0.511	0.174	0.051	0.261
Q1-7) 家畜の堆肥は肥料として使っている	0.071	0.502	0.044	0.143	-0.048
Q1-8) 稲わらは飼料として使っている	-0.022	0.496	0.189	-0.003	-0.076
Q2-6) お年寄りの世話は家族や近所の人達と相談しながら世話をしている	0.174	0.490	0.467	0.022	-0.030
Q2-7) 地元で取れた農産物はフリーマーケットで買うなど、地域で消費するようにしている	0.127	0.444	0.306	0.164	0.126
Q1-1) 農家仲間農機具の貸し借りをしている	0.181	0.439	0.170	0.068	0.209
Q1-6) 収穫した産物は直売所・路地で販売している	-0.031	0.429	0.051	0.089	0.213
Q1-2) 農作を祈る昔からの風習が今でも残っている	0.190	0.377	0.319	0.069	0.305
Q2-4) 近所の人に譲るときは、農産物をわざわざ包まずにそのまま渡す	0.129	0.142	0.703	0.146	0.117
Q2-5) 毎日、近所の人が訪ねてくる	0.194	0.259	0.688	0.107	0.053
Q2-3) 近所の人が野菜などを（予告なしで）置いていってくれることがある	0.172	0.160	0.675	0.206	0.005
Q2-16) 自分の屋敷内の庭を手入れしている	0.116	0.039	0.652	0.124	0.184
Q2-2) 料理は、近所にもおすそ分けすることがある	0.142	0.373	0.625	0.099	-0.173
Q2-1) 特に約束などなしで、近所の人とお茶を飲んだりする	0.202	0.351	0.604	0.116	-0.123
Q2-15) 自分の庭（屋敷）でとれた食材を優先して食べている	0.097	0.031	0.554	0.158	0.296
Q2-11) 土地ならではの言い伝えや言葉が残っている	0.217	0.285	0.490	0.204	0.162
Q2-10) 毎年、地域のお祭りがある	0.251	0.083	0.467	0.134	0.361
Q2-9) 地域の防災対策は毎年行っている	0.313	0.314	0.436	0.077	0.111
Q2-17) 時間の使い方は、自分のペースでできる	0.106	-0.070	0.427	0.206	0.230
Q2-8) 地域の運動会は、毎年参加している（運動会は地域の年中行事である）	0.241	0.366	0.394	0.106	-0.014
Q3-5) 自然の山菜（わらび、ぜんまい等）や果実がとれる	0.037	0.175	0.109	0.799	0.098
Q3-8) 山並みや溪流、段々畑等、自然の景観がいい	0.086	0.212	0.026	0.764	0.007
Q3-4) 虫やかぶとむしがいる	0.085	0.091	0.147	0.757	0.072
Q3-7) 草や花の香りがする	0.153	0.047	0.263	0.723	0.060
Q3-3) 晴れていれば、星はよく見える（空気が澄んでいる）	0.121	-0.029	0.209	0.720	0.157
Q3-2) 山で虫取りや川で釣りをして遊ぶことができる	0.118	0.230	0.221	0.593	0.055
Q3-6) 近所の川の水が飲める	0.003	0.316	0.051	0.560	-0.153
Q3-1) 春、夏、秋、冬の四季を体験している	0.148	-0.100	0.368	0.504	0.300
Q1-5) 水源は維持・保全している	0.139	0.178	0.258	0.188	0.479
Q1-3) 休耕地にしないように工夫している	0.104	0.262	0.301	0.070	0.431
Q1-10) 農業に関する集まりやイベントを毎年行っている	0.285	0.402	0.207	0.114	0.412
固有値（因子の分散）	13.473	4.303	3.127	2.321	1.481
寄与率（因子の説明力）	26.9%	8.6%	6.3%	4.6%	3.0%
累積寄与率	26.9%	35.6%	41.8%	46.4%	49.4%

■絶対値0.5以上 ■絶対値0.4以上 ■絶対値0.3以上



るために目に見えるものにこだわった。祭りの意義や地域共同体の存続程度、これを今に至るまで動かしている力について、何らかのかたちで直感的に掴めるような質問を検討した。しかしながら言葉にすれば「静的」なものにいきおいとどまってしまうのである。また、本来の地域のダイナミックな動きや、優雅に泳ぐ鴨の不断に動く足に相当するものをあまりに漠然と捉えすぎていた。それらは潜在力に包括的に表れると仮定したためである。したがって例えば、地域を作り上げているのに必要な、継続する力・変化を取り入れる力・地域を活性化させるリーダーの存在・地域の変化を歴史や時間で捉える力について、考慮が不足していると考えられる。

もう一つの空白の指標をどう位置づけるか。いくつかの地域で試行した。その結果、これらの5つの軸による評価で思うことはあるが、しかし当初筆者が意図したような、うちの地域はこんなものではない、といてこの5指標では飽き足らないものを議論し出したり自ら記入したり、ということにはなかなかならなかった。そのことを普段から考えているわけではないし、価値が日常そのものだからそれに対する思いをどのような言葉に載せるのか、得手不得手も影響する。

さらには、このような指標化は「上から目線」の人々によって地域のランキングに使われる可能性もある（小田切 2010）。これは当研究所の意図するところではない。仮にそのように一人歩きしてしまった場合には、きわめて不遜なものと扱われるであろう。この点を懸念せざるを得ない。この場合、地域の潜在力のとらえ方は、より個人の生活から豊かに導き出されるものとする必要がある。

こうしたことから、一般的な5指標による潜在力の解析は、必ずしも十分ではなく、また、追加の空白の指標による議論のきっかけ作りも、期待されるほどの効果はないとの評価に達した。

次節では、これらの不足点を補い、個人が行うのにより親和性の高いシートについて検討する。

## 5. ダイナミックな動きを加味した潜在力把握のアプローチ

### (1) 基層の力

この15年間で約6千の集落が都市化または無人化により農業集落機能

を失った（農水省 2011 実現会議資料）。こうした状況下で、地域再生の取組みはすでに理論的な整理を終えていかに実践するかに局面が移っている。豊富な実践例からその活動の意義を解釈し、地域再生の理論的枠組みの完成度を高める研究も結実している（小田切他 2011）。本稿では、こうした研究と実践から得られた知見をもとに、地域住民が自らの生活環境の価値を簡易に再確認できる術を検討する。

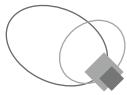
前節では、「農業への思い・日常生活への思い・地域の支援体制・自然への感受性・都市および地域内での関係性」の5つの柱を想定して地域の潜在力を計測しようとした。本節では、この5本の柱をもたらず基層の力を捉えようとする。この基層の力をつかむためには、地域という場において、この5つの柱に表されるその豊かさをどのように培っているか、その豊かさにどう気づくか、豊かさをどう継続しようとしているか、これを把握することが必要である。このため、表層を支える力として次の要素を抽出した<sup>9)</sup>。

- ・「普通」を守る力
- ・「普通」を継続する力
- ・地元の「当たり前」を発見する力
- ・仲間作りの力
- ・外からの刺激を誘う力
- ・外からの刺激を受け止める力
- ・外からの刺激を取り込んで翻訳し、今までのものに付け加える力
- ・自分たちの力によって今の場がつけられているとさらに気づく力

こうした力を持っていれば、「伝説や歴史を敬いながら常に進化する共同体」になり得ると考える。このためには、「普通の人たち5人衆からなるリーダー群」（小田切 2010）がいるかどうか、その地域に月3万円程度の収入を得る小さな産業をつくる力があるかどうか、例えば特色ある農家レストランのように、「調味料＝適量」といった数値化できないかけがえのないものをどれだけ持ち、かつ、それを意識しているか、それらの要素を自

9) 本要素は、岩崎 2010・内山 2010・玄田他 2009 などの文献調査を踏まえて関連する要素を列挙し、複数の現地調査と小田切徳美先生・鈴木宣弘先生・永木正和先生からの意見聴取の結果を整理したものである。





分たちで作り上げていく力があるか、という質問を用意した。

## (2) アンケート調査

### 1) 設計

上記の質問群と、前節で聞いた5つの柱を聞く質問群を併せたものが、地域住みよさ調査のアンケート票（農協共済総合研究所 2010 所収）である。このアンケート調査は、大分県国東市（旧国見町、旧国東町）を対象地域として行った。

大分県国東市は、安心院方式で著名な農泊のモデルを構築した安心院町（現・宇佐市）に隣接している。高齢化率は、旧国見町 43.0%・旧国東町 36.2%である。この値は、昭和 60 年から平成 17 年の間にそれぞれ 20.3 ポイント、16.3 ポイント増加した。人口減少と急速な高齢化が進んでいる。人口と世帯数は、順に 5,125 人・2,219 世帯、12,851 人・5,266 世帯である（2009 年 3 月末）。

調査対象者は、この地域に居住する世帯の世帯主または主婦である。調査方法は、無作為抽出留置調査法で、集落の全世帯を母集団とし、25 世帯のうち 1 世帯の割合で機械的に選び、調査員が訪問して調査票を留置いた。調査対象設定数 330 サンプル、回収数（有効数）は 302 サンプル（回収率 91.5%）であった。回収の際には調査員が再度対象者を訪問し、調査票に目視のチェックを入れ空白部分の補足記入を促している。調査期間は 2010 年 8 月 27 日（金）から 9 月 5 日（月）までである。調査票の配布には、国東地区グリーンツーリズム推進協議会の協力を得た。

大分県国東市を調査対象とした理由は、人口減少下において、安心院町の活動に刺激を受けて同様に農泊を推進していること、しかも安心院と異なり地域内に温泉などの観光資源を抱え、むしろ安心院よりも農泊により適している地域であるという自負で、これを展開してきたことがあげられる。第 2 節のアンケート調査は全国の農家を対象に行ったが、本節では、この国東のように地域資源を活性化して豊かな地域社会をつくろうと実践している地域を対象とした。というのも、農泊という地域の表層に表れる活動を支える基層のダイナミックな力を把握しようとするならば、平均的な農村像よりはむしろ実践地域に焦点を絞る方がこの力を浮き彫りにしやすいからである。

### 2) 調査結果の活用

アンケート調査結果の基本的な傾向と内容の詳細は、単純集計とクロス集計による傾向の把握をおこなった報告書に譲る（農協共済総合研究所 2010）。ここでは、地域の潜在力を「自ら簡易に感得する」観点からこのアンケート調査結果を再度加工する。

言うまでもないが、これらの調査の質問群について、前節と同様に因子分析などを行うことによって、基層の構成要素に対する認識につき一定の傾向を見いだすことができる。意図のわかりやすい質問群であるから、回答に困難はないと考えられる。その結果得られた得点群で、アンケート調査の母集団とのメリットデメリットを知ることとも可能となるだろう。

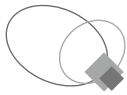
しかしながら、本アンケート調査は 22 問からなりその質問数は 200 を超える。これを全量活用するのは量的に負担である。また、その潜在力の要素間の相互作用をみて関連の高い質問群を分類し、質問を集約することもできる。それでも、潜在力を前面に出す質問では、「自ら簡易に」確認するには迂遠なものを受け止められる可能性が高い<sup>10)</sup>。そこで、基層の要素に関連する表層の有無の質問の回答結果との関連を調べ、後者への回答によって前者の要素がどれだけ具備されているかを計測することとした。

その理由を 2 点指摘する。第一には、すでに指摘した質問の数の集約による回答者の負担の軽減である。もうひとつは、前節で、5 つの要素に加えて 6 番目の要素である地域独自の潜在力もしくは地域ならではの力を掲げていただくことを提案したものの、実際の運用ではきわめて難しい結果となっていることに起因する。潜在力はあらかじめわからないから潜在化しているのであり、これを直接聞くことは回答者に意図せざる負担を強いるというデメリットが大きいと考えられるからである。すなわち、表層の活動を聞いて、ダイナミックに地域を動かす基層の力の程度を推計する方がよいと考えられるからである。

### 3) 基層につながる表層の要素

基層の要素としては、アンケート調査であらかじめ予定した力を想定した。具体的には、①日常生活そのものが財産 ②知恵と伝統が息づいている

10) 現地調査ならびに農業リスク研究会における複数の系統外有識者の発言。



こと ③それでも開かれた地域であること ④暮らしの安全と楽しさがある  
⑤変化の潜在力に満ちている、の5つである。

(a) 最初の「日常生活そのものが財産であること」は、調査票の「問4 あなたの住んでいる地域は、次のそれぞれの項目について、どの程度あてはまると思われますか。」のうちの「1) 人々の日常生活そのものがこの地域の財産といえる地域である」という選択肢に対する回答結果である。この回答結果に関連する表層の事象を5つ選ぶ。選択は、クロス集計表の差の検定による影響度の大きさから選択し、一部は回答結果の条件付き確率の大きさによった。ただしこの回答結果は、「2) 日常生活を住民同士が分かちあえる地域である。3) 地域に住む一人ひとりが主役になれる地域である」の回答結果ときわめてよく似た関連性を持つ。このため、日々の日常を重視すると暮らしにおいて互いに手をさしのべあい住民が主役になっている状況をともに表すものとなる。

この回答結果に高い関連を持つものは次の質問であった（いずれも p 値は 0.001 より小さい）。

- ・問 3-9 山並みや溪流、段々畑等、自然の景観がいい。  
 $\chi^2$  値 = 32.151
- ・問 2-2 豊作を祈る昔からの風習が今でも残っている。  
 $\chi^2$  値 = 25.212
- ・問 1-7 地元の農産物はフリマで買うなど、地域で消費する。  
 $\chi^2$  値 = 21.001
- ・問 10-1 地域の意見をまとめてくれる組織・団体がある。  
 $\chi^2$  値 = 25.519
- ・問 10-8 病気について相談できる組織・団体がある。  
 $\chi^2$  値 = 45.914

これらの質問に肯定的に回答すると、「日常生活そのものが財産であること」への評価が高まる。

(b) 次に②と③知恵と伝統が息づいていること・それでも開かれた地域であることについては、「問4 あなたの住んでいる地域は、次のそれぞれの項目について、どの程度あてはまると思われますか。」のうちの「4) 暮らしを支えてきた自然と楽しくつきあえる地域である 5) 郷土を培った知恵や

伝統が息づいている地域である」の回答結果である。ただしともによく似た関連性を持っていたので、両者を統合する。なお、伝統を守る知恵があることは、開かれた地域であることの意義は興味深い。地域を守り続けるためには開かれていなければならないのである。

この回答結果に高い関連を持つものは次の質問であった。

- ・問 13 地域で趣味等を楽しむ為の自主的活動がある。  
 $\chi^2$  値 = 29.486
- ・問 17 地域外の人の活動や機会について、訪問してもらう取組みがある。  
 $\chi^2$  値 = 18.494
- ・問 6 「知恵袋型のリーダー」がいる。  
 $\chi^2$  値 = 16.135
- ・問 1-11 土地ならではの言い伝えや言葉が残っている。  
 $\chi^2$  値 = 19.503
- ・問 3-5 かぶとむしがいる。  
 $\chi^2$  値 = 16.737

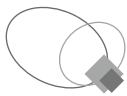
これらの質問に肯定的に回答すると、「伝統を生かす知恵と開かれた地域」への評価が高まる。

(c) ④「暮らしの安全と楽しさがあること」は、地域自治組織の活動目標から求めた（小田切 2010）。暮らしの「安全」「安心」「楽しさ」「豊かさ」を実現する活動の有無と程度である。調査票上は、「問 20 あなたがお住まいの地域では、次のようなことについて、それぞれの程度あてはまりますか。（それぞれ1つずつ）

- 1) 暮らしの「安全」を守る防災活動が整備されている
- 2) 暮らしの「安心」を支える地域福祉活動が充実している
- 3) 暮らしの「楽しさ」を作り出す地域行事が充実している
- 4) 暮らしの「豊かさ」を実現する経済活動が充実している

への回答結果である。

この結果とほかの質問群の回答結果との関連をみたとき、上記の1) と 2) はきわめてよく似たパターンを取った。3) と 4) のそれも同様である。また、簡易な把握という目的のために、この要素を分割せず、さらに統合することとした。ここでは、1) と 3) に肯定的に答えた回答結果と関連の強い質問を選択する。いわば地域自治組織の目的達成に向けた活動の有無である。



この回答結果に高い関連を持つものは次の質問であった。

- ・問 12 5. 地域の伝統行事を次世代に教えている。F = 20.433
- ・問 16 住み続けたいと感じられる地域づくりが行われているか。  
F = 18.272
- ・問 18 地域から離れた人が帰ってくる産業づくり。  
F = 18.267
- ・問 17 地域外の人々の活動や機会 1. 産品購入の機会・場がある。  
F = 15.403
- ・問 12 役所の職員が独居高齢者の話を聞く。  
F = 11.677

これらの質問に肯定的に回答すると、「暮らしの安全と楽しさを培う地域であること」への評価が高まる。

(d) 最後の「⑤変化の潜在力に満ちている」は、心の豊かさについて5年前と比べて変化と5年後に予想される変化をみるものである。調査票では、「問 21 5年前と比べて、人間関係や興味・関心・趣味、暮らしの質などの点で、あなたご自身の生活が豊かになったという実感はありますか。(1つだけ)

※収入など金銭面・経済面のことは除きます。

1. 11.9 そう思う 2. 18.5 ややそう思う 3. 35.1 あまりそう思わない  
4. 23.2 そう思わない 5. 8.3 わからない 無回答 3.0」と

「問 22 では、現在と比べて、5年後は、あなたご自身の生活は豊かになりそうだと思いますか。(1つだけ)

※収入など金銭面・経済面のことは除きます。

1. 9.3 そう思う 2. 11.6 ややそう思う 3. 35.8 あまりそう思わない  
4. 25.8 そう思わない 5. 14.6 わからない 無回答 3.0」

のふたつの質問への回答結果である。経済状態ではなく、心の豊かさを聞いている。このふたつのうち、ともに良い方になると回答した結果に関連する質問群を選んだ。

- ・問 14 地域外の人との交流を通じ、学ぶ活動。χ<sup>2</sup>値 = 19.644
- ・問 11-2 農家の女性達のさまざまなチーム活動。  
χ<sup>2</sup>値 = 18.185

- ・問 10-2 いざという時に、頼りになる人や団体がいる。  
χ<sup>2</sup>値 = 16.118
- ・問 15 過去1年間の地域イベント 5. 伝統的な料理教室がある。  
χ<sup>2</sup>値 = 11.026
- ・問 1-8 地域の運動会は毎年参加している。χ<sup>2</sup>値 = 11.313

これらの質問に肯定的に回答すると、「より良い変化の潜在力に満ちている地域であること」への評価が高まる。

## 6. 「地域のいま」再確認シート

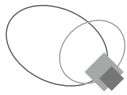
### (1) 基層の認識に加えるもの

前節の表層の質問群への回答結果により、基層の力を推定することができる。ところで本稿では、冒頭に述べたように、「農村において進行している『誇りの空洞化』(小田切 2010)に何らかの歯止めをかけようとする」。このため、「数ある歯止めのための手段の選択肢の試論として」、「いま、そこにあるもの」をかけがえのないものと認識するための、柔らかい心を再び呼び覚ますツールとシーンをつくらうとする。これは地域という場によって培われ育てられ、そして自らその地域を育てていくのを再確認することであった。このためには、潜在力の推計では必ずしも十分ではない。例えば地元学が目指したのは、再発見による住民の意識の変化であった。これと同様のことを本稿でも試みる。

潜在力に気づいてもらうのは、自らの力の再確認である。自分の地域をみる目が変わり、その意識の変化で自分が変わり、地域を守り伝える力につながる。このことを、ここではトランスフォーメーションと捉える。これは、環境やそこに住んでいる人は変わらないけれども自分の認識を変えることによって新たな価値を見出すものである(上田 1997)。

この要素を加えることによって、「地域」と「地域を支えてきた住民自身」に感謝する気持ちを持っていただくこととするのである。このために、次の3つのシーンを提案する<sup>11)</sup>。

11) この内容は上田 2000 によるところが大きい。このほか、中西他 2006・オコナー他 2006・アンドレアス他 2004 を参考にした。



## (2) 地域をみる条件の分類

母親は我が子に無条件の愛を注ぐ。至当である。では、友人・知人・地域についてはどうか。条件付きで肯定するのであろうか。無条件に受け入れるものもあるだろうか。この観点から、地域で目につくことを想起し、次のシートに書き込んでもらう。

第1象限では、無条件に好きな地域のこと、第2象限では、この状態ならこの地域が好き、第3象限では、この状態の地域は嫌い、第4象限では、地域のここが嫌い、そのことを記入する。

このようにして、自分の生まれ育った、もしくは住む地域をどう見ているかを条件の有無で再評価する。

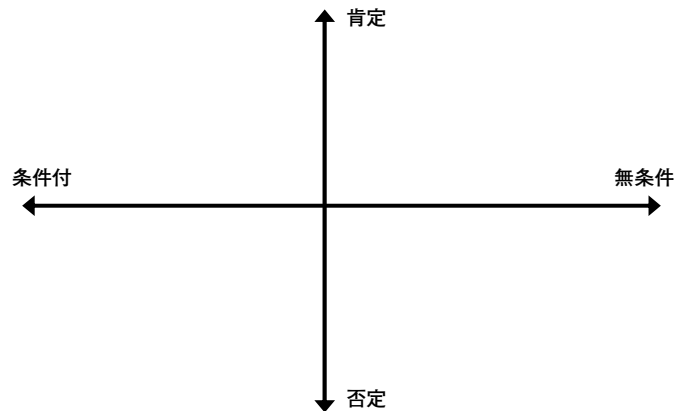


図1 地域の条件別の感覚を記入してみてください

## (3) 思い出の品

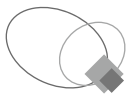
地域の中での経験において特に思い出すものとその思い出のシーンを想起する。それを数点書き出してもらおう。例えば幼少期の経験であれば、ドングリ→夏休みの工作、大きな木とその根の清水→喉の渇きをいやした道草、庭のひまわり→台風でも倒れなかった、など。思い出をたどるシーンを提供することにより、地域に育てられてきた自分を振り返る。あわせて、幼少期、一日がいまよりもととても長かったときの、わくわくしながら過ごした時間を思い出す。

■地域に関する幼少期の思い出の品と、それにまつわるシーンを記入してみてください。

思い出の品	思い出の情景
例) 清水	道草と友達

## (4) 地域との出納帳

上記のふたつのシーンは、当たり前と受け止め無意識のうちにある地域との関係をより強く意識させるものであった。最後に、住民がその地域と地域の誰かから得たこと、地域とその地域の誰かに対してしたことを3つ程度自由に書いてもらう。一種の出納帳である。地域を擬人化していることがポイントのひとつである。



■地域からもらったこと、地域にしたことを記入してみてください。

誰に	あなたが受けたこと	あなたがしたこと
地域の〇〇さんに		
地域の里山に		

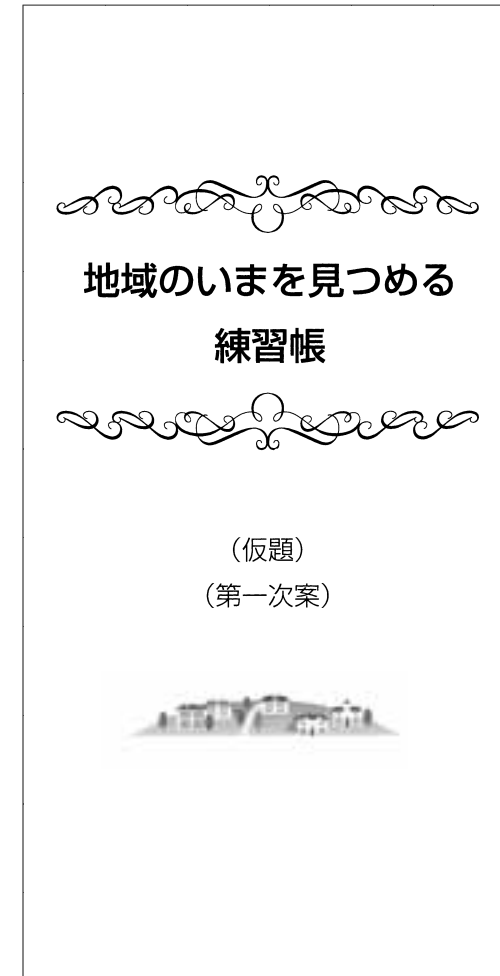
これは、地域における人とのつながりがどれだけ個人にあるのかという点でソーシャルキャピタルの厚みをあらためて考えるものである。また、「したこと」と「してもらったこと」を対比することによって、たとえば後者が多ければ、いままでの様々な恩義に気づくことにもなる。地域に関する出納を考えることにより、地域によって育てられてきて、地域をまた育てるという観点を示唆するためのものである。

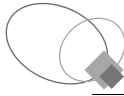
3つのシーンを掲げたが、これを書くこと自体が一種の特別な体験になればいいと考えている。書いているうちに、想定外なことに気づく可能性もある。そのことを容認する、そんな余裕を持った質問用紙であり、予定外の空白の質問用紙である。そしてこれらが一人一人の気づきのための契機となるものとして、その内容を解釈していただきたい。

上述の内容を含んだシートを次に掲げる。未だ試行段階ではあるが、これによって回答者が地域の潜在力に気づき、守られ守り育てることに目が向くことがほんの少しでもあれば、その目的は達成される。

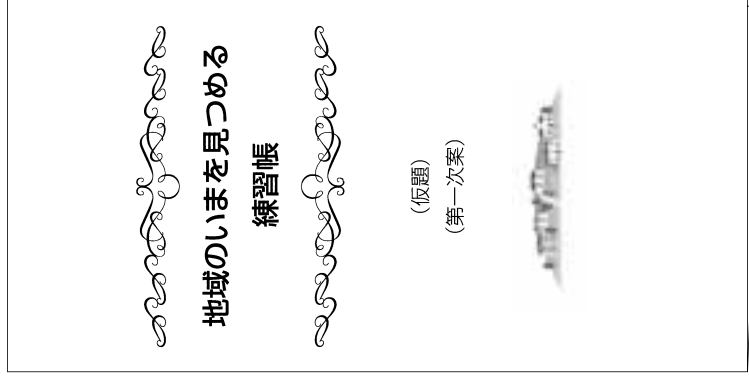
(5) 「再確認シート」一次素案

上記の内容を盛り込んで、次のような『「地域のいま」再確認シート』のリーフレット形態のものを作成した。





・展開図  
1) 表紙



2) 左扉 (■の領域) を開いた状態

I. あなたの地域では、次の項目に あてはまるものはいくつありますか？

**A群** あてはまる：○  
あてはまらない：×  
山並みや溪流、段々畑等、自然の景観が美しい   
農作を昔からの風習が今でも残っている   
地元の農産物はフリマで買うなど、地域で消費する   
地域の意見をまとめてくれる組織・団体がある   
病気になるまで相談できる組織・団体がある

**B群** あてはまる：○  
あてはまらない：×  
地域で趣味等を楽しむ為の自主的活動   
地域外の人の活動や機会 訪問してもらおう取り組み   
「知恵袋型のリーダー」がいる   
土地ならではの言い伝えや言葉が残っている   
かぶとむしがいる

**C群** あてはまる：○  
あてはまらない：×  
地域の伝統行事を次世代に教えている   
任み続けたいと感じられる地域づくりが行われているか   
地域から離れた人が帰ってくる産業づくり   
地域外の人の活動や機会 産品購入の機会・場がある   
役所の職員が独居高齢者の話を聞く

**D群** あてはまる：○  
あてはまらない：×  
地域外のひととの交流を通じ、学ぶ活動がある   
農家の女性連のさまざまなチーム活動がある   
いざという時に、頼りになる人や団体がある   
過去1年間の地域イベント 伝統的な料理教室がある   
地域の運動会は毎年参加している

地域のいまを確認するシートです。

3) 右扉 (■の領域) を開いた状態

I. あなたの地域では、次の項目に あてはまるものはいくつありますか？

**A群** あてはまる：○  
あてはまらない：×  
山並みや溪流、段々畑等、自然の景観が美しい   
農作を昔からの風習が今でも残っている   
地元の農産物はフリマで買うなど、地域で消費する   
地域の意見をまとめてくれる組織・団体がある   
病気になるまで相談できる組織・団体がある

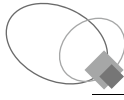
**B群** あてはまる：○  
あてはまらない：×  
地域で趣味等を楽しむ為の自主的活動   
地域外の人の活動や機会 訪問してもらおう取り組み   
「知恵袋型のリーダー」がいる   
土地ならではの言い伝えや言葉が残っている   
かぶとむしがいる

**C群** あてはまる：○  
あてはまらない：×  
地域の伝統行事を次世代に教えている   
任み続けたいと感じられる地域づくりが行われているか   
地域から離れた人が帰ってくる産業づくり   
地域外の人の活動や機会 産品購入の機会・場がある   
役所の職員が独居高齢者の話を聞く

**D群** あてはまる：○  
あてはまらない：×  
地域外のひととの交流を通じ、学ぶ活動がある   
農家の女性連のさまざまなチーム活動がある   
いざという時に、頼りになる人や団体がある   
過去1年間の地域イベント 伝統的な料理教室がある   
地域の運動会は毎年参加している

地域のいまを確認するシートです。

II. ○の数 は地域の力を表しています。  
■A群は「日常生活そのものが財産といえる地域」の度合いを表しています。  
■B群は「知恵と伝統が息づく開かれた地域」の度合いを表しています。  
■C群は「暮らした安全や楽しさを表現する地域」の度合いを表しています。  
■D群は「心豊かな生活が時とともに高まる地域」で ある度合いを表しています。



4) ひらに右扉（■の領域）を開いた状態

Ⅲ. 地域と地域を支えてきたあなた自身を振り返ってみよう。

■あなたが地域に思う条件別の感覚を記入してみよう。

肯定

← 条件付 →

→ 無条件

← 否定

■地域に関する幼少期の思い出の品と、それにつながるシーンを記入してみてください。

思い出の品 例) 流水	思い出の場所 例) 公園

■地域からもらったこと、地域にしたことを記入してみてください。

誰に 地域の○○さんに	あなたがやったこと あなたがしたこと

地域の思い出を振り返るシートです。

Ⅱ. ○の数に地域の力を表し

■A群は「日常生活そのものが合っている」と表しています。

■B群は「知恵と伝統が息づく」と表しています。

■C群は「暮らしの安全や楽しさ」を表しています。

■D群は「心の豊かな生活がある度合い」を表しています。

Ⅰ. あなたの地域では、次の項目にあてはまるものはいくつありますか？

**A群** 山並みや清流、段々畑等、自然の景観がいい  
農作物を育てる昔からの風習が今でも残っている  
地域の農産物はフリマで買うなど、地域で消費する  
地域の意見をまとめてくれる組織・団体がある  
病気になるまで相談できる組織・団体がある

**B群** 地域で趣味等を楽しむための自主的活動  
地域外の人の活動や機会 訪問してもらったり取り組み  
「知恵袋型のリーダー」がいる  
土地ならではの言い伝えや言葉が残っている  
かぶとむしがいる

**C群** 地域の伝統行事を次世代に教えている  
住み続けたいと感じられる地域づくりが行われているか  
地域から離れた人が帰ってくる産業づくり  
地域外の人の活動や機会 産品購入の機会・場がある  
役所の職員が畑の高齢者の話を聞く

**D群** 地域外の人と人の交流を通じ、学ぶ活動がある  
農家の女性達のさまざまなチーム活動がある  
いざという時に、頼りになる人や団体がある  
過去1年間の地域イベント 伝統的な料理教室がある  
地域の運動会は毎年参加している

5) 下扉（■の領域）を開いた状態

Ⅲ. 地域と地域を支えてきたあなた自身を振り返ってみよう。

■あなたが地域に思う条件別の感覚を記入してみよう。

肯定

← 条件付 →

→ 無条件

← 否定

■地域に関する幼少期の思い出の品と、それにつながるシーンを記入してみてください。

思い出の品 例) 流水	思い出の場所 例) 公園

■地域からもらったこと、地域にしたことを記入してみてください。

誰に 地域の○○さんに	あなたがやったこと あなたがしたこと

地域の思い出を振り返るシートです。

Ⅱ. ○の数に地域の力を表し

■A群は「日常生活そのものが合っている」と表しています。

■B群は「知恵と伝統が息づく」と表しています。

■C群は「暮らしの安全や楽しさ」を表しています。

■D群は「心の豊かな生活がある度合い」を表しています。

Ⅰ. あなたの地域では、次の項目にあてはまるものはいくつありますか？

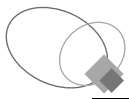
**A群** 山並みや清流、段々畑等、自然の景観がいい  
農作物を育てる昔からの風習が今でも残っている  
地域の農産物はフリマで買うなど、地域で消費する  
地域の意見をまとめてくれる組織・団体がある  
病気になるまで相談できる組織・団体がある

**B群** 地域で趣味等を楽しむための自主的活動  
地域外の人の活動や機会 訪問してもらったり取り組み  
「知恵袋型のリーダー」がいる  
土地ならではの言い伝えや言葉が残っている  
かぶとむしがいる

**C群** 地域の伝統行事を次世代に教えている  
住み続けたいと感じられる地域づくりが行われているか  
地域から離れた人が帰ってくる産業づくり  
地域外の人の活動や機会 産品購入の機会・場がある  
役所の職員が畑の高齢者の話を聞く

**D群** 地域外の人と人の交流を通じ、学ぶ活動がある  
農家の女性達のさまざまなチーム活動がある  
いざという時に、頼りになる人や団体がある  
過去1年間の地域イベント 伝統的な料理教室がある  
地域の運動会は毎年参加している

地域と地域を支えてきたあなた自身に、感謝いたします。ありがとうございます。



## 7. おわりに

### (1) 特別なシーン

本稿では、特別なシーンの体験の意義を踏まえて、日常の中で地域を再認識する手段を検討した。地域の潜在力を「自ら簡易に感得」し、その意義を再認識するのである。

いわゆる「特別な体験」(special experience)の意義はもちろん否定していない。むしろ劇的な変化を人々にもたらすという点ですばらしい。ボーイスカウトやガールスカウト、あるいは高野孝子氏の指導する国際的な教育プログラムは実に内容豊富であり、短い期間に子どもたちが成長するのが明確にわかる貴重な機会である(高野 2010)。しかしこの種のプログラムの問題を強いて挙げるとすれば、特別すぎて参加のハードルが極めて高い人々がたくさんいることである。教育的見地でも子どもへの参加を促しても子どもが乗ってこない。こうした現実のなかでは、「特別な体験」の疑似体験を誘う簡易な普及版の必要性を高める。もちろん本家からは本物とは認められないであろう。「特別な体験」のもたらす効果は普及版の簡易さに反比例するからである。このあたりはコストとの兼ね合いもあり、普及版はその効果も所詮簡易版となるという安易なことになりやすい。

しかしあらためて問う。誇りの空洞化が進行している農山村において、あまねく自立を強いる財源も時間もない状況下で、それぞれの地域の方々に自らの力に気づいてもらう機会をどのように設けることが可能であろうか。簡易な方法は、残された数少ない試みのひとつと考える。その是非の評価も含めて、より詳細に自分たちの力を再確認したいと思えば、自ら企画して地域資源発見のためのイベントを企画実行するなど具体的な行動に取り組めばよい。このシートの簡易さでも十分と思うのであれば、その人にとってはそれ自体でかけがえのないことなのである。つまりは自己確認と、批判者にはさらなる活動へのきっかけ作り、そうした効果を持つことが期待できるのではないか。

定期的に行われている特別なシーンとしては、地域のお祭りがある。お祭りは遠い祖先との魂の交流といわれる。七夕の短冊にしてもひな祭りの菱餅にしても、その時だけ、その形状に至る伝統に込められた祖先の力を

感じる。それはいまの日常の平穏さをさらに再確認させるものとなる。このシートの潜在力への喚起が、その祭りの効果ほど強いとは言わない。むしろ祭りの効果を意識しながら、日常に溶け込んで実施できるものはないかを検討した結果である。

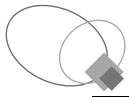
### (2) 今後の課題

本稿は、あくまで、限られた地域と予算のもとで行われたこのアンケートを基礎に作られた試論である。アンケートの対象となった国東地域と同様の傾向を持つ農村地域において実施することには一定の効果を期待できる可能性がある。しかしより広範な地域で網羅的に実施するには、さらに大規模な調査とデータの蓄積により精度を高める必要がある。

シートの質問内容と方法論にもさらなる工夫の余地はあろう。むしろよりよいシートの内容を積極的に議論していただきたい。本シートのメリットはコストの圧縮である。それ故に簡便すぎるという批判もあろう。現段階の案にも、その簡便さに対する疑義が数人の系統外有識者から提示されている。地域の潜在力はより深くしかも多様であり、これらをあまりにも単純化しすぎているのではないかという指摘である。甘んじて受けたい。それは著者自身が現地調査を踏まえて痛感することでもある。むしろ現地で話を聞かせていただいたその一人ひとりの中にある心の動きのほうに潜在力としてよほど説得力があった。それをたかだか20箇の質問で把握しようとするのはそもそも難点がある。その再現と把握について、本稿はまだ未熟であるといわざるを得ない。

しかし農村地域の誇りの空洞化を前に、「どっこい生きている」人々の今の自分の優れた潜在力を、簡易な方法によって気づいてもらう試みの意義をあらためて強調しておきたい。気づいていただく対象のすそ野を広げる試みである。地域自治組織の核になって動いている人にはすでに気づいているがゆえに素朴すぎる内容であっても、これから気付きを期待される人たちにとっては本シートがその契機になる可能性もあろう。伝統行事とは異なる特別なお祭りのようなことを企画実行する費用と組織がなくても、単に日常の広報誌の折り込み付録のようなもので可能な仕掛けがあっても良い。あえてネット社会への対応を省略している。それは本稿がかけがえのないものと位置づけた日常なるものへのこだわりの結果である。日





常は、実は特別なシーンの積み重ねで構成されていること、特別なシーンは繰り返されて当たり前になって日常化し、さらに別の特別なシーンの登場によって新たな変化を今までの日常の要素に融合させながら取り入れる、そうした長い時間を織り重ねて得られた生活そのものだからである。地域再生には新たな取り組みが必要なこと、異論はない。しかし再生もまたひとつの変革である。こうした変革を着実に行うには、時代を超えて生き残ってきた変わらないものを知り、これを尊重することが不可欠であろう。だからこそ日常の生活を裏打ちする変わらないものを大事にし、これが特別なシーンを都度経て形成されてきた人々の知恵の結晶であることを強調したいのである。従って本稿の再確認シートのような、祭りに代表される誰にとってもそれとわかる「特別な体験」を仕掛けることなく日常の中で「少しやってみようか」という気持ちで行ってみることを意義をあらためて指摘しておきたい。

## 付 記

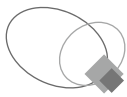
本稿は、2010年1月に企画され、その後約1年をかけて検討された「地域住みよさ指数（仮称）の開発」にかかる成果物として取りまとめたものである。本稿は、その検討の時期が示すとおり、いわゆる「平時」において、人口減と高齢化による地域の弱体化に悩む地方圏の集落の住民に、当たり前の「日常」の持つかけがえのない価値をどうしたら意識してもらえるかという観点からつくられている。2011年3月11日の震災の影響を考慮していない。震災のために多くの人々の「日常」が破壊された。被災地では、外部の強烈な力で失われた「日常」を取り戻そうとする強い反発が生れている。被災地にどれだけの復興支援ができるかを問われているいま、本稿のような「平時」の議論による「日常」の価値の再確認は、そのままではこの状況に適さない。失われた「日常」を取り戻すために具体的な活動を実践する局面では、本稿が想定するような前提のもとでの研究にできることは極めて限られる。

しかしこの認識のもとでも、本稿をあえてその分析の当時のままに発表することとしたい。ふたつの視点から、「日常の評価」を再評価する必要があると考えられるからである。ひとつは、大災害が復興に向けての全体

主義につながりやすいことへの懸念である。例えば、復興の諸活動を円滑にするため超法規的措置を要請する声上がる。ところがこれは、場合によっては私権の極端な制限を伴いながら、被災地の大規模再開に転化する可能性がある。この大規模再開が、被災者の日常の復旧とはかけ離れた、例えば新たなリゾート開発や従来と著しく異なる土地利用構想となることもありうる。こうして、いわゆる「災害資本主義」(Disaster Capitalism) (Naomi Klein 2008) を誘う可能性が高まる。このような事態に一定の歯止めをかけるために、「日常」を守る観点から被災地の地域の力を核とした復興が望ましいと主張する意義はあろう。もうひとつの視点は、災害は特別な共同体を生みだすことが知られており、これを「日常的なもの」にどのように転化し、維持するかが問われるからである(レベッカ・ソルニット 2010)。この2点ともに、「日常の復旧」がかなめとなる。従って本稿が主題とする「日常の再評価」の声が様々なかたちで訴えられていれば、かけがえのない「日常の復旧」に幾ばくかの力になろう。この「日常の再評価」こそが本稿の主題である。少しでも早い復興と日常を積み重ねることのできる普通の日の到来を祈りつつ(2011年5月21日)。

## 【引用文献・資料】

- ・岩崎正弥, 高野孝子. 場の教育: 「土地に根ざす学び」の水脈. 農山漁村文化協会, 2010.
- ・橋詰登. “農山村地域の活性化状況と市町村の活力診断: 地域活性化指標による市町村活性化度の比較”. 農村経済活性化プロジェクト研究資料第4号 農村活性化の指標と地域資源の活用. 農林水産政策研究所, 2003, p.1-34.  
「定住水準と農林業の力の41指標を用いた地域活性化度 地域活性化診断シート」  
[http://www.affrc.go.jp/OLD/ja/research/seika/data\\_nriae/h14/primaff02010-1.jpg](http://www.affrc.go.jp/OLD/ja/research/seika/data_nriae/h14/primaff02010-1.jpg)  
[http://www.affrc.go.jp/ja/research/seika/data\\_nriae/h14/primaff02010](http://www.affrc.go.jp/ja/research/seika/data_nriae/h14/primaff02010)



[http://www.affrc.go.jp/OLD/ja/research/seika/data\\_nriae/h14/primaff02010-3.jpg](http://www.affrc.go.jp/OLD/ja/research/seika/data_nriae/h14/primaff02010-3.jpg) 20110328

- ・ ジョセフ・オコナー, アンドレア・ラゲス. 小林展子, 石井朝子訳. NLPでコーチング: 最高の人生を生きるためのライフ・コーチング実践ガイド. チーム医療, 2006.
- ・ コニリー・アンドレアス, タマラ・アンドレアス. 穂積由利子訳. コア・トランスフォーメーション: 癒しと自己変革のための10のステップ. 春秋社, 2004.
- ・ 松田紀之. 質的情報の多変量解析. 朝倉書店, 1988.
- ・ 宮西悠司. 「地域力」を高めることが, 「まちづくり」につながる. 都市計画. 2004, Vol.53, No.1, p.72-75.
- ・ Naomi Klein, *The Shock Doctrine: The Rise of Disaster Capitalism*. Picador USA; Reprint版, 2008.
- ・ 農林水産省. “土地利用型農業の競争力強化に向けた検討事項(案): 水田農業を中心として”. 第2回 食と農林漁業の再生実現会議 20110121, 内閣官房国家戦略室. [http://www.npu.go.jp/policy/policy05/pdf/20110121/siryou3\\_1.pdf](http://www.npu.go.jp/policy/policy05/pdf/20110121/siryou3_1.pdf) 20110215
- ・ 中西紹一, 松田朋春, 紫牟田伸子, 宮脇靖典. ワークショップ: 偶然をデザインする技術. 宣伝会議, 2006.
- ・ 農協共済総合研究所. 地域住みよさに関する調査結果報告書. 2010.
- ・ 大江正章. 地域の力: 食・農・まちづくり. 岩波書店(岩波新書), 2008.
- ・ 小田切徳美. 最近の農村政策の動向と背景. 共済総合研究. 2010, vol.58, p.6-41.
- ・ 小田切徳美編著. 農山村再生の実践. 農山漁村文化協会, 2011.
- ・ 大竹文雄, 白石小百合, 筒井義郎. 日本の幸福度: 格差・労働・家族. 日本評論社, 2010.
- ・ 大塚久雄. 共同体の基礎理論. 岩波書店, 1955.
- ・ 佐々木一成. 地域ブランドと魅力あるまちづくり. 学芸出版社, 2011.
- ・ レベッカ・ソルニット. 高月園子訳. 災害ユートピア: なぜその時特別な共同体が立ち上がるか. 垂紀書房, 2010. (原著: Rebecca Solnit.

*A Paradise Built in Hell: The Extraordinary Communities That Arise in Disaster*. Viking, 2009.)

- ・ 生源寺眞一. 農業再建: 真価問われる日本の農政. 岩波書店, 2008.
- ・ 内山節. 共同体の基礎理論. 農山漁村文化協会, 2010.
- ・ 玉城哲. “日本農業の近代化過程における水利の役割.” 水利の社会構造. 国際連合大学, 1984.
- ・ 豊福晋平. 学校の社会的価値定義と地域教育力. 日本教育工学会研究報告集. 2007, 07(2), p.153-158.
- ・ 上田紀行. 癒しの時代をひらく. 法蔵館, 1997.
- ・ 上田紀行. 20日間で自分を変えるトランスフォーメーション・ワークブック. 宝島社(宝島社文庫), 2000.
- ・ 内田由紀子. “幸福度の構成要素も踏まえた指標化について 第2回幸福度に関する研究会 資料.” 内閣府. 20110216. <http://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/shiryou/2shiryou/5.pdf> 20110328
- ・ 山内直人. コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルの役割. 環境情報科学. 2010, 39-1, p.10-15.
- ・ 山内直人. “ソーシャル・キャピタルと社会イノベーション” 社会イノベーション研究会ソーシャルキャピタルWG報告書(平成20年度内閣府経済社会総合研究所委託事業: イノベーション政策及び政策分析手法に関する国際共同研究成果報告書シリーズ No.6. 山内直人他. 財団法人未来工学研究所, 2009, p.6-12.
- ・ 結城登美雄. 地元学からの出発: この土地をきたた人びとの声に耳を傾ける. 農山漁村文化協会, 2009.
- ・ 電通 abic project 編. 和田充夫, 菅野佐織, 徳山美津恵, 長尾雅信, 若林宏保著. 地域ブランド・マネジメント. 有斐閣, 2009.
- ・ R. D. Putnam. *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 1993.